

故郷の喪失

— 第三の神話

深瀬基寛

室生犀生の有名な『抒情小曲集』のなかに

ふるさは遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

帰るところにあるまじや。

という一節がある。「望郷」はたしかに東洋の詩魂の強力な一つのモチヅである。飛行便がなかつたからだ。明敏な批評家、加藤周一氏は最近の日本読書新聞で文学における故郷の問題を論じて、永井荷風のもつていた二つの故郷、パリと江戸について語り、また南仏とノルマンディに二つの故郷をもつていたアンドレ・ジイドについて語っている。そして昨年ペン・クラブでフランス代表として来日したシャンソン氏の意見、つまり故郷を二つもつていたことがジイドの弱味であつて、故郷は一つでなければならぬ、文学者は故郷に住み、いつもその言葉を話してなければならぬという意見を引用している。フランス文学におけるヴァレリーの強味がそこにあるという。文学論の出発点、もしくは究極点として故郷を考えることは非常に面白い考え方だと私は思う。というのは近代日本文学の基調は室生氏の場合のように故郷喪失か、荷風の場合のように二つの故郷をもつか二つに一つだからである。そして真

に偉大な文学はこの関係からいえば、一つの故郷の発見、というよりは結局のところは一つの故郷の創造という点に存するのではないかと考えられるからである。現にアメリカとイギリスを二つの故郷としたエリオットは二つの故郷に分裂する代りに、詩においてヨーロッパという、今では失われた一つのコンチネントを創造することに成功している。彼の努力はヨーロッパの「意味へ接近」することによつてヨーロッパの経験を「別のかたちで取り戻す」ことであつたということができよう。またアイルランドとイギリスに二つの故郷をもつたW・B・イェーツは人間の初原のイメージの創造という詩人としての最大の課題の解決に七十年の一生を捧げつくした。

O may she live like some green laurel

Rooted in one dear perpetual place.

『わが息女のための祈』という有名な詩のなかのこの反訳不可能の二行においても「なつかしき常住の場所」は「一つ」しかない。しかもこのばあい、「常住」^{パーペチュアル}とは固定でなくて運動であり、その運動が永遠である点において、この「木」のイメージは「舞踏」のイメージに通ずるものを持つている。「根を張る」べき国土はついにアイルランドであつた。故郷はついに一つでなければならなかつた。自身分として divided loyalty (ふた心) ということが遂に悲劇に終るように、文学の世界では、divided heart (二つの故郷) ということは遂に文学の大乗でなくて小乗ではないかと思われるのである。ピカソの一首両面のイメージは文学の究極のイメージではなさそうである。

ここでわたしが「故郷」という古くさいことばで言い表わしたいと思つてゐることの焦点は、さほど古くさいとはわたしは思わない。しかし、はなしを具体的に受け取つてもらうために、戦雲に捲き込まれて跡かたも亡くなつた私の生家のイメージ、私の心象の中でなくてはもはや誰一人の記憶にも残つていない、私だけの古くさい「田園の憂鬱」からはなしを始める方がはや道ではないかと思う。

平野のまんなかに何百坪かを四角に区切つた地域のなかに藁葺の母屋と別棟の納屋と土蔵がある。門前の通路の右には野菜畑と桑畑がある。裏は一面の藪である。祖母が植えた自慢の楊梅の老樹がある。ザボンの蜜柑畠がある。たなごころに容れない大きなザボンを懐いたまま枝から滑り落ちてきん玉をすりむいた私の禁断の木だ。柿、栗、桃、梅、サボテン。犬、猫、鼠、イタチ、フクロウ。今の私には亡いものばかり。しかし何も私はここで喪失した故郷を種に浪漫主義的憂鬱論を追つ始めようとしていたのではない。私の言いたいのには、このような遠い過去の記憶に残る景物のなかの任意の一点にいま佇んで、前後左右を眺め廻してみたときに、あらゆる視角度において、現実以上の新鮮なイメージがまだに成立しているということ。景物と景物との相関的なつながりが佇立の一点を中心としてどの方向にも無数に成り立っていて、しかもそのつながりがすべて鮮かなイメージのかたちでいまでも随時に再現されるということ。故郷というものが思慕の対象としてよりも一つの感覚として、しかもその感覚が（ラモン・フェルナンドスの適確な造語でいえば）球体感覚（サンス・グロバル）として円みを帯びてよみがえつてくることである。文字通りにアト・ホームである。例えば雪穩の窓に巢を張つた春日局のような女郎グモ。窓の外の日蔭の青柿。それをもぎ取つて私に与えた父親が母親に叱られている光景。五エモン風呂の尻の痛さ。風呂場から眺めた火車のような夕映え。私の顔を息のとまるほどこすりながら風呂場で鼻歌をうとう父親。母の好物の焼き味噌の煙。

英語に *bearing* という名詞がある。先日この単語の意味を哲学出の或る友人に訊ねられて、私は自己流の説明をした。自分の進路と周囲との相関的な関係で、それもその関係がとかく見失われやすい場合に使われる。「途方に暮れる」という日本語の熟語の「途方」に当りはしないだろうか、と答えた。日暮れて道遠し。いまこの単語を「故郷」について適当してみると、故郷とは途方に暮れない場所、風呂場から眺めた夕映、焼き味噌の煙、*sense of place*（ヘリオット）の生かす（*living*）*one dear perpetual place*（イェーツ）なのだ。

思慕の対象としての故郷の観念の代りに右に述べたような、肉づけされた方位感覚というものの喪失、さらにイエーツの言葉を借りていえば、*right mastery of natural things* の喪失という観念を置き代えてみるならば、何といつてもこの一事こそは現代の失樂園というより外はない。それは、自然と人間、人間と人間、神と人間、言葉と人間、その他あらゆる二つのものあいだの関係の切断である。イエーツの課題を追求した *Romantic Image* という本の著者 Frank Kernode はエリオットの掲げた標語 *dissociation of sensibility* を以てエリオットにおける「第二の人間墮罪」のマイル・ストーンと見る面白い見方を提出している。科学的には「世界」の発見の世紀だった十七世紀が、詩的には「第二の人間墮罪」の世紀だったというのは何という皮肉であろう。人間は世界を発見することにおいて、詩的には方位の感覚を喪失した。「がらん洞の家跡でからまわりの世界の廻転」が始つた。故郷の喪失に続いて人間の喪失が始つた。十七世紀が「第二の人間墮罪」の世紀だとすれば、現代はもう「第三の墮罪」へさしかかつているのではあるまいか。方言を詩人から奪い去つた科学者が記号の翼に乗つて地球を廻転しようとしている。詩人は「梯子を失くしたので、心臓の悪臭の店先で寝る」より外はない。「誰の葬式でもありはしない、埋める者がいないんだから。」

イーディス・シトウェル博士は近刊の *Collected Poems* の巻頭に極めて興味のある長文の自作解剖を試みているが、彼女の長詩 *Gold Coast Customs* にびびりてこう書いている——

この詩は第二次世界大戦に導くまでの一つの状態についての詩である。それはそういう状態から当然起るような事態——それがじつさい起つたのだ——についての明確な一つの予言である。(第二のルビ・筆者)

さらにまた『カインの影』について——この詩は世界が互に格闘する微分子にまで分裂することを書いた詩だ——

破壊し、また自己を破壊する微分子。それは、兄弟と兄弟との分離、カインとアベル、国民と国民、富者と貧者の分離という形をとつたあの「第二の人間墮罪」このかた、人類の進んだ徐々たる移住——「寒冷」の沙漠のまん中へ、最後の災厄へ向つて移動して行つた精神的移住についての詩である——その最初のシンボルがヒロシマに落下したところのあの最後の災厄へ向つて。

大正の初年に室生犀生の一句によつて触発された私の少年期のおさないロマンチズムが短い私の一生のあいだに早くもシトウエル博士の「カインの影」によつて結ばれなければならない。私の郷里の村にはじめて電灯がとぼつたのは明治の末年であつた。晩酌の手を休めて天井を仰いだ祖母は「もしや狸たぬではあるまいか」と叫んだ。故郷とはそんなにもたわいない、愉しいものであつた。その後わずかに三世代のあいだにいつのまにかわれわれは第三の失業園の入口に立たされている。しかもシトウエルによれば、最後の災厄はその最初のシンボルがヒロシマにおいてさきほどやつと実現したばかりだというのだ。「故郷の喪失」という問題はいつの間にかロマンチックな後ろ向きの問題でなくなり、眼もあてられない痛々しい現実の問題になつて来たようだ。